206

画本江戸土産

初編

広重筆

金幸堂梓

叙

絵本江戸土産の原版ハ今を去ること一百年宝暦のそのむかし書肆某に需られて西村重長なるもの手を専にし跡を追て次編ハ鈴木春信といへる画工の是を嗣りしかなむその頃大に流行して絵本の鼻祖と仰れしも一年規模の火災に罹り彫板悉く烏有となりぬ嗚呼惜哉此書の世に絶て今ハ其繁華もかはり殊に中古の風俗を

鶴舞千年松

見るに足れど然るに名所古跡とも云べきも多く星霜を経るに及びて浮華なるに移り〳〵て遠回り種々に思ひ起し唐古事に写し現在の在る所を画にして再び時の時勢を考し今孝子が丹誠にて遠く他郷の景に至りて新たに遊観は時勢を知るの一助ともならんと再刻成の日余に序を請ふ余速に筆を採りその意を述べて端書に換るといふ

庚戌初秋日

雲水隠人題

八ツ見橋之景

常盤橋と呉服橋との中央にある一石橋といふ後藤両家左右にありこれを五斗五斗にてよりなしかくの名づくるものとぞ此辺よりみわたせば一目に橋の八ツ見ゆる故に俚俗にかく称あり

其二

両國橋
長さ九十六間あり
万治二年に始て架る
むかし武蔵と下総の
境なるをもつてかく唱しを
今は両岸武蔵となりて
只二國はその名のこる
東都第一の繁華に
両岸の茶亭見せ物
辻講釈或は納涼
花火の宴昼夜の
賑ひ絶ることなし

御厩河岸
駒形堂
金龍山
遠望
吾妻橋より北の方
凡七八町の上にあり
実に比なき
光景あり

宮戸川 吾妻橋

すみだ川の下流にして宮戸川ハ旧名なり又今の浅草川といふか吾妻橋の長さ七十六間安永年中にかけはじめて隅田川にかかりし橋のうちまでこの橋東都に大橋の其一にして風景よし

隅田川
真乳山の夕景

真土山夕眺くまなく
隅田川とむかうの
人の家とけん末知ミ
名所勝地ありて
この辺すべて
旧跡多し

隅田堤花盛

隅田の堤は
吾妻橋より
千住大橋の際に
いたるまで長き
塘なり人にむかし
享保のころより
芳野の桜を植
られしとて今も
弥生の中空には
雲かと見えて咲つゞく
実に仙境の
さまにて勝地なり

水神の森
真崎乃社

真崎ハ浅草の方にして水神ハ川向ひにあれども古きハ社にて物舊神寂ていと多しこの辺ハ風雅の風景あり詩哥の人を屋ふに秋すゝく水鶏名所もこの辺にておもしろし

花屋敷
秋の花園

柳嶋妙見社

押上萩寺

当寺の
ひとへに
艸花を咲せて遊観
とするもの
彼処此処に
多けれど
萩の
勝るに
いつも人との
境内に備ふ
ものなし
殊に風流家
の名のなく
第一の萩寺
なるべし

吾嬬の森

亀戸
梅屋敷
梅茶屋方に薫るをもて
清香庵と自ら
称せし外新の一樹籬に
けしきど手く果く新
ある茶の墨の振ひは
他邦にいまだ比も及ばず

筑紫に名高き
御社をこゝに
模して
東宰府と
その神徳は
いふも更なり
池の辺の藤の花
色をも波の底にも
紫の色りを
うつす水の鏡
そうへるその反橋も
名ど其けふ
亀戸の名物とや
いふべからん

亀戸天神乃社

薬師堂
この境内の杜若の花の
かの八橋の風景
また大門の桜の並木は江戸にあらねど若樹の色また一入の絶景なり
木下川の風景

逆井乃渡

竪川通の末にして葛西へわたる渡しあり此より先は小松川の村落耕耘の在さま菜圃の体風流好士の捜索なり

國府臺眺望

利根川に臨む赤壁にて四方亮も万里を一目に見下る
ここは里見家の城址あり

どもが真間の跡すゞろに漫に
もの思ひて
古蹟の勝地を
いと興あり

真間の継橋
手子名の社

真間の
継橋よ見て
な
奈の社との
辺古跡
楓くあり
秋ハ紅楓に
名高くて
とりわけの
遊人
こゝに
遊ぶ

真間の紅楓

利根川ばら〳〵松

坂東一の大河なれバ
異名を
坂東太郎と
よぶ鯉を
りて名物とす又
川風に揉まれ
屈曲して松ハ自然
の振をなし眺望
尤も勝れたり

中川

隅田川と利根川の其中間に
來るをもて名を中川と称す
ゐんとハ魚の多く
在りて春の末より
秋まで網舟釣舟
日毎に絶ず往人
ら快楽の地と
いふべし

小奈木川
五本松
此松ハかの千年の
実ふ稀代の
名木なり

五百羅漢
さゞゐ堂

黄檗派の禅
院にて開山鉄眼
禅師なり
寛保の比三匝堂を
建立し五百の羅漢の像を
置く楼に栄螺と
いふ名あり
他邦に類も及ぶべからざる見込
も稀代の梵刹なり

京都書林

大坂書林

東都書林

[illegible] 菱屋七郎兵衛

三条通御幸町 吉野屋仁兵衛

心斎橋通久太郎町 河内屋喜兵衛

同 博労町 河内屋茂兵衛

西横堀船町 加島屋清助

下総佐原 正文堂利兵衛

信州松本 高美屋甚左衛門

芝神明前 岡田屋嘉七

本石町二丁目 英大助

越州福井 山崎屋清七

馬喰町二丁目 菊屋幸三郎 版